

十日戎開門「神事」の創造

— 「門開け」から「神事」へ 高度経済成長以降の日本文化のあり方に関する一考察 —

荒川 裕紀

Invention of Tōka-Ebisu “Opening of the Gate” Ceremony

A perspective about the state of the Japanese culture after high economic growth

ARAKAWA, Hironori

Abstract

Every year on January 10., the main gate (known as the “red gate”) at Nishinomiya Shrine in Nishinomiya City, Hyogo Prefecture, is opened at 6 a.m for visitors to proceed to the main shrine. The event is known as the Tōka-Ebisu “Opening of the Gate” Ceremony. The first three people to arrive at the main shrine are designated *fuku-otoko* (lit. “men of fortune”). Media coverage of the event has increased from year to year, with not just local Kansai-area media but also the national television networks. Nowadays, we call this “Opening of the Gate” is not a event but “Ceremony”.

How did this ceremony originate? How has it changed over the years and due to what factors? The present article seeks to answer these questions through an examination of the historical record. Using such contemporary sources as newspapers and the shrine’s daily logs I will focus in particular on developments in the modern period from later years of the Meiji period (1868–1912) to the present. My goals are to show how this ceremony changed in parallel with the transformation of modern society, the Pacific war, and high economic growth. Most of Japanese folklore event was not changed by the pacific war but high economic growth. 12 years ago, researching of this ceremony was started. I traced “*fuku-otoko*” from Taisho era to the present. In this thesis, I show that “*fuku-otoko*” list for understanding social structure among 20th to 21st Century in Hanshin Industrial Area.

Key words: EBISU, FUKU-OTOKO, Shinto, Shrine, Nishinomiya, Hanshin industrial area, Invention of Tradition, Cultural Events

1. はじめに

私は、43号から45号の研究報告において、兵庫県西宮神社で毎年1月10日に行われる「十日戎開門神事」の歴史の変遷、特に明治期から大正期の変遷について鉄道・電鉄といった産業化されていく側面、改暦という歴史的事象の中から新暦での十日戎が生み出され、その中で「門開け」が新聞紙上において注目されてきたことを示した¹⁾。

44号では、その「門開け」が新聞紙上で多数登場するようになった1930年代、特に1937年（昭和12年）からの新聞（大阪朝日新聞・神戸新聞・大阪毎日新聞）の記事を紹介し、そこから当時の門開けがどのような形で報道されていたのかについて紹介した。その中で、現在の開門神事がどのような語句で言い表されているのかを抽出した。また現在の福男の語句がいつ登場したのかを探り、それが大阪毎日新聞の1939年（昭和14年）からであることを明らかにした。

45号の論考においては、1945年の敗戦によって西宮神社ないし十日戎が、どの様に変容していったかを探った。西宮空襲など戦争による被害は甚大ではあったが、1951年（昭和26年）の日本が主権を回復する頃より、十日戎は本格的な復興を遂げた、とした。昭和30年代には、「門開け」行事に戦前に行われていたような、競争的な意味合いで多くの人が参加をするようになったことが、新聞紙上で現われていた。

これら3つの論考の中で明らかにしたのは、西宮神社の門開け行事が、「忌籠（イゴモリ）まつり」を起源にしながらも、西宮地域の産業都市化、時代の変化に伴って変容を遂げていったことである。このような時代的な流れの中で、当初はこの門開けはイベントとして仕掛けられたともいえるだろう。しかし、参加者の中にはそのイベントに恒例行事と認識して参加した者もいたことを同時に挙げた²⁾。そして、旧暦の祭では参加していなかった、ないしは出来なかった、地方からの移入者などの「新住民」が青年団の形で関わり、新しい祭りの担い手となってきたことを明らかにした³⁾。

今回、焦点を当てた時代は1960年代から70年代という日本の高度経済成長期である。この時期に西宮の神事がどの様に変容をしたのかを明らかにする。これまでの私の研究の中で明らかにしたことは、1966年（昭和41年）に「門開けの禁止」⁴⁾があり、その後、新聞報道が以前に比べると減少したことであった。本報告ではその前後でどのような問題が西宮神社で起きていたのかについて新聞記事を中心にたどっていく。これまでの新聞、社務日誌を中心とした調査において、開門神事の年次的な参加人数についても把握している。12年前より始めた調査の結果、福男の年齢、職業、そして参加人数の変遷についてはすでに2001年（平成13年）に発表している。今回の論考でこの結果を再確認した上で、そこからどのようなことが読み取れるのか、特に高度経済成長期での当行事に関する変容を考察する。

このような、資料の分析とともに、実際に昭和30年代後半と50年代前半に参加した一番福、およびその家族からのインタビューを含め、当時の神事を取り巻いていた状況を複合的に理解し、変容の考察に含めていく。そして、現在ではこの行事を指す「十日戎開門神事」の語がいつから生まれたのかについて、資料や神社関係者からの調査をもとに明らかにする。

2、本論考の概要

本論考での意図として、次を挙げる。(1) 神事の禁止措置があったにせよ、この行事は昭和40年代の新聞記事と昭和30年代からのものとを比較をすると、取り上げられることが明らかに少なくなっている。高度経済成長期という、物質的な豊かさを享受しだした人々や社会において、そこまでの比重を占めなくなったのであろうか。(2) この「停滞の時代」において、どういった人々がこの行事を支えていたのか。そして昭和50年代を経て、陸上競技会的ないしは「福男レース」なイメージで語られる現在の「開門神事」へと変遷を遂げることとなるが、伝統の再評価となったのにはどのような要因が働いたのか。(3) 神社側としては、居籠という神事が午前4時より境内にて行われており、開門はただ「門を氏子のために開け放つ」意味しか持たない行為であった。それがなぜ「開門神事」と呼ばれるようになったのか、の3点である。

これらの問題へのアプローチ手法としては、先述の新聞資料の他に神社関係者および、神事の参加者などへのインタビューなどである。

(1) の問題に関しては、まず高度経済成長による人々の娯楽の多様化が挙げられるだろう。娯楽が多様化したこと、そして産業化による社会構造の変化によって、それまで行事を支えていた人々、戦前期にその中心にあった青年団などの組織が活発化出来なかったのではないかと推察する。

新聞資料などからは、十日戎自体の参拝者は年々増えており、西宮以外の広範な関西地域での年中行事化に西宮神社自体が大きく貢献したことは否めない。しかし参詣客が多くなり、参詣者数や賽銭の金額ばかりが大きく報道されることによって、戦前戦中そして戦後と大きく記事に取り上げられてきた「門開け」が、相対的に小さくなったことは、人々の興味・関心に対応しているのと同時に、門開けと一緒に語られてきた、十日戎の原点ともいえる「居籠」の意味の重要度が少なくなってきたことも意味する。

第43号の研究報告では、これまでの先行研究から西宮の十日戎は「イゴモリ(居籠・忌籠)祭り」ないしは「御狩(みかり)神事と呼ばれていたこと。そのイゴモリとは西宮神社で10日の大祭を迎えるまでは、氏子中が精進潔斎の謹慎状態に入ることであるとされた。10日の大祭になるといつもとは違う心持ち、すなわち神人和合の境地「ミカリ(ミカハリ)」となって、各戸から本殿まで駆け出し参拝をすることが、西宮神社の十日戎の特徴であることを明らかにした。この報告からも居籠がもともと氏子を対象としたものであったことから分かる。

高度経済成長を経ての十日戎の大衆化、ないしはその成長にともなう交通手段の多様化とくにモータリゼーションはこれまでに以上の参詣客を西宮神社にもたらした。し

かしそのことによって、それまで西宮神社の氏子地域が守ってきたイゴモリの習慣が希薄化し、福神、商売神である「えびす神」への参詣の部分が切り取られ、大きくなったのではない。

その中で(2)として挙げた「どのような人が行事を支えていたのか」について考えていきたい。本論考では、停滞の時代に入る前の昭和30年代の福男と昭和50年代の福男へのインタビューを試みた。昭和30年代の福男は、西宮市在住で阪神間の高等学校で陸上部であった人物であり、最終掲載された福男の表から見て分かるように、昭和20・30年代に多かった福男、ないしは参加者の典型的な例として、当時の行事が分かると考えたからである。昭和50年代の福男は、昭和40年代から新聞紙上に頻繁に現われてくる山陰地方、四国地方、和歌山などの阪神間から考えると周縁部にあり、漁業神としてえびす神を信仰している地域からの人物である。

高度経済成長によって、社会構造が変化し、西宮神社の十日戎が、阪神間においても商業神としての参詣の部分で語られることが多くなった。その中で、漁業神として、「福を授かりに来る」ために訪れた漁業関係者たちが「一番詣り」に価値を見出したとは考えられないだろうか。そして、阪神間からすると周縁部の人たちによって、当行事の持つ意味に再び「気付かされ」、昭和60年代以降から続く、参加人数の増加へとつながり、それが新聞への報道へと反映されたのではない。

(3)の神事化に関しては、いつから「神事」と呼ばれるようになったのかであるが、歴史的にこの行事を一番多く取り上げられている神戸新聞では、1996年(平成8年)からである。比較的新しいことがここから分かる。これまでの神社関係者のインタビューや文献より、あくまで神事と呼べるものは「居籠」であり、これは、現在では神社の境内で午前4時から行われている。門はただ参詣者を招き入れるために開けるだけのことであり、その行為自体に関しては重きが置かれていないことを確認している。これまでの平山昇氏の論考であるように⁹⁾新暦の十日戎が電鉄の発達によって盛んとなり、それまでは閉門に関してはさほど重視されていなかったのだが、電鉄の終夜運転によって境内に深夜でも参詣客がいる状態となった。

その状態を受けて「境内だけでも居籠するため」に10日の午前0時を持って閉門をするという確認がなされた。その居籠りを終えての「参拝の再開」に参加者は知らずのうちに神人和合の境地である「ミカリ」の感覚を得て、そこに「一番詣りには、福が来る」との言説を備える形で現在の福男競争へと発展した。ただそのような感覚を持つのはあくまで参加者であり、神社側ではないことに留意する必要がある。

現在では、神社の出す告知板にも「開門神事福男選び」¹⁰⁾とあり、公式に神事という言葉が認定されていると言って良い。多くの人がそこに「神事」の雰囲気を感じ取り、そこに神社側そして参加者という主客双方のコンセンサスが得られたからであろうか。いつから神社側が神事、そして「福男競争」から「福男選び」という語句を使うようになったのかとともに、神社へのインタビューを紹介しながら、「開門神事福男選び」の語の創造について考察を行いたい。

次項からは、まずは前回の研究報告で見た1950年代後半すなわち昭和30年代以降のこの門開けがどの様に変遷し

ていったのか、これまでの研究で出した結果なども用いながら上記の意図である(1)と(2)の点について、考察を行いたい。

3、昭和30年代から50年代にかけての門開け行事の変遷

前回の論考で述べたように、1953年(昭和28年)の門開けの正式な再開からは、着実に参加する人々も増えることとなった。参加人数の推移、そしてどういった人々が福男となっていたのかについて、属性、年齢などを2001年の論考にて調べていたが、その表を更新して出したい。参加人数は、新聞社(神戸新聞、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞)によって多少のばらつきがあるが、この行事が正式に再開してからは、戦前までとはいえないまでも、着実に福男競争が活発化している流れが見て取れる。

しかし、この着実な復興を遂げつつある、まさにその時期に最も大きな事件が発生した。それは「福男競争の中止」である。

1961年(昭和41年)1月10日付神戸新聞夕刊には

「・・・午前六時開門した。戦後十三年間続けてきた呼びものの福男レースは、今年から危険防止などのため中止されたが、それでも四国方面からの団体客ら約百人が開門を待ちかねて参拝した。」

1966年(昭和41年)1月11日神戸新聞阪神版には

「・・・午前六時の開門を待ち切れず集まった参拝客は約百人。太鼓の合図とともに赤門が開かれると暗やみの中を足ばやに本殿目指していった。戦後続いた“福男”レースが今年は中止とあって、われ先に一番乗りを目ざす風景もなく、静かな“本えびす”の幕開けだった。」

1966年(昭和41年)1月11日付読売新聞阪神版にも

「・・・昨年までは赤門から拝殿までこの一年の福男のタイトルをかけ競争する「福男行事」が行われていたが、危険防止のため今年から廃止され殺気だった例年とは違った静かな門開け神事だった」

などとある。新しく作られた行事であるとはいえ、50年近くも続けられていた競争、また神社が福男の認定を行い始めた1940年から見て25年の歴史があったこの競争が終わってしまったのである。

どのような要因がそうさせたのであろうか。中止される5年前の1961年(昭和36年)に、このような事件が門開けの行事の直前で起こっていた。

1961年(昭和36年)1月10日付神戸新聞夕刊

「サイ銭箱のフタでなぐり合い 開門のことからケンカ 十日午前四時五十分ごろ西宮神社の表門(赤門)の外側で“福男一番あらい”の開門を持っていた群集の中で、男二人(うち一人は中学生)と自家用車で乗りつけてきた男とが開門の時間のことからケンカ、自動車の部品とサイ銭箱のフタでなぐり合いとなり、西宮署員に現行犯でつかまえられるという一幕もあった。」

さらにこの事件については毎日新聞の1月10日付の夕刊が詳しい。(原文は氏名が実名。アルファベットに改変して提示)

「鉄棒振り回す福男志願者 西宮署は十日午前四時五十分ごろ同市杜家町、西宮神社赤門前で、西宮市の飲

料水製造業A(二八)、尼崎市白タク運転手B(二三)、芦屋市同運転助手C(二一)を暴行現行犯で逮捕した。BとCの2人は西宮神社の本えびす行事として同朝午前6時から行われた福男一番乗りレースに参加するため白タクを運転して赤門前に駆けつけ門前で開門を待っている人たちに「開門は何時や」と尋ねたところAが「八時や」と偽りの時間を教えたため口論になり、二人は自動車から長さ六十センチと三十センチくらいの鉄棒を持ち出しAの頭をなぐりつけた。Aと同人の弟中学三年D(一五)の2人もそばにあったさい銭箱のふたで相手の顔や背中をなぐるなど互いになぐり合ったもの。」

この5年前の事件が、直接の原因になったとは考えたいが、中止の遠因としてこの行事が、無規範の状態で行われていることが読み取れ、5年後の文章にもある「危険」だから中止へとつながっているのではないか。

これまでの門開け行事関連の新聞記事では出てこなかった交通機関として「自家用車(毎日新聞では白タクだが)」の存在がこの2つの記事では現われている。この自家用車の存在が、公共交通機関の発達以上に、より広範囲での門開け行事の参加を促すこととなり、「福男レース」以外の門開け行事が持つ意味の希薄化が同時に進むこととなったのではないか。

大阪と神戸を結ぶ阪神国道(国道2号線)は早くから完成していたが、平行線である第二阪神国道(国道43号線)が一級国道へと昇格するのが1959年である。1964年に名神高速道路の西宮ICが出来、1970年には西宮神社から200mも離れていないところに阪神高速道路の西宮ICが出来るなど、高度経済成長に伴って阪神間にモータリゼーションが本格的に到来した。前回の論考でも書いたが、昭和20年代後半よりバスで遠方の観光客も参拝に来ることとなったが、それと同時に終電を気にしないマイカーでの参詣者、そしてそれらの人々による福男レースへの参加も目立つこととなった。

高度経済成長によるモータリゼーションが原因となっており、より広範囲な地域からの参詣が可能となった。それはえびす信仰の総本社として西宮神社の十日戎が関西地方にて認知されることとなった。しかし、それと同時に門開けの行事に関しては、これまで西宮神社の氏子地域が守ってきたイゴモリの習慣を希薄化させることに拍車をかけ、より「福男競争」として認知されることにもつながった。それは、この行事があくまで祭事としてもともの氏子が守りつづけてきたものではなく、公共交通機関の発達に伴い同時に発達を遂げた「新暦の十日戎の門開け行事」であったため、戦前であっても新しく移入してきた「新住民」が比較的自由に参加できたことが関係する。この自由度が「西宮ならではの十日戎の門開け」の持つ意味を急速に希薄化させていった。

このような大正期から戦前にかけて出来た行事であるが、この時期に至るまでは神人合の境地である「ミカリ」としての部分を守り続けていた人々は、これまでの調査からも多くいたと考えられる。彼らがこの昭和40年代の急激な変化に対応しうることには出来なかったのか。新聞を見る中で、昭和40年代から50年代にかけて門開け行事の記事があまりにも少ない。この急激な変化に拍車をかけたのは守り続けた人がこの時期、参拝者の総数

に比して少なかったのではないだろうか。

前回の報告で、戦中戦後にこの行事を支えた主催者としては青年会や消防団組織があったと述べた。先ほどの事件を考える時、昭和30年代にはこれらの組織が欠如していたのではないかと。1963年(昭和38年)1月11日神戸新聞阪神版で昭和30年代に門を開けていた露天商組合の方の取材記事があるので、ここで紹介したい。



記事1: 1963年1月11日付神戸新聞、左下写真が竹中氏

「えべっさんの総本家」西宮神社の十日えびすの圧巻はなんといっても十日早暁の恒例「福男選び」。この日も午前六時かきりに、赤門が開くと、徹夜で待機していた青年たちはいっせいに本殿へ走り出し、およそ八十人の中から三人の福男が選ばれた。この神事に奉仕すること二十年、ことしもまた赤門の内側で忙しく立ち働いている老人の姿が、参詣人の目をひいていた。この老人は西宮市浜脇町一七、竹中彦一さん(七四)で、四十年前から同神社の祭礼には露店を出しているコンブ商。二十数年前当時同神社のいっさいを切り回していた地元消防団が手を引いてしまった。福男選びは室町時代からおおよそ四百年もつづいている神事だけに廃止することもできず、神社側は露天商で作っている戎商業協同組合の竹中組合長に白羽の矢を立てた。門あけ神事だからといって簡単に赤門のカンヌキを抜けばよいというわけではない。門の外にいるのは寒風に吹かれながら待ち構えている血気さかりの青年ばかり、中には酔っぱらいもいる。開門の時間が近づくと少しでもスタートがよいようにして先を争って力いっぱい門を押してくる。だから内側には十数人で人ガキを築かなくてはならない。しかも、タイコの合図です早くカンヌキをはずすと同時に散らなくては踏みつぶされてしまう。このほか、抜けがけを防ぐため十日は夜遅くまでかかって境内の露店を回り、寝ている人たちを調べなくてはならない。こんなふうに竹中さんの仕事は神事をスムーズに進行するための指揮者というわけ。この朝も、高張りチョウチンを片手に喜寿に近い高齢者とは思えぬ元気さでさい配を振っていたが「戦争直後は本殿は戦災で焼けてしまい、参拝人も少

なくさびしかった。ここ数年の間にやっと戦前のような活気を取り戻した。祭りの期間中は毎日2,3時間しか眠らないが、えべっさんになると元気が出てくるから不思議だ。といっても、この年だからことしだけでもうだめだと毎年思いながらここまで来てしまった」と感慨深そうに話していた。」

とある。「えべっさんになると元気が出てくる」という神事としての非日常性を感じながら、一生懸命奉仕する竹中氏の姿が目につく。一方でこの記事からは、氏子地域、神社の中で祭の主体がどこにあるのかということの議論があまりなされなかったことも読み取れる。

明治以前からの伝統の祭とは異なりながらも、公共交通機関の発達に伴い、新たな住民を含めた「新しい地縁」でこの行事をおこなうことが出来ていた社会構造が、この高度経済成長に伴うモータリゼーションによって、そういった地縁が相対的に希薄化し、無秩序の状態の中でこの行事が行われるといった形に大きく変わってしまったと言えるのではないだろうか。

つまり新しい変革に祭りの主催者がついて行けず、そして社会の多くの人が十日戎の原点が居籠にあることに気付かないために、この祭事の「危険性」「無法性」のみがクローズアップされるようになってきたのではないかと。

中止前年の1965年(昭和40年)の1月11日付の神戸新聞阪神版の「ひとこと」には

「・・・なだれ込む人波に押し倒される人も出て大混雑。幸いケガ人は出なかった⁷⁾からよかったが、警備を担当する警察側は毎年のことながら心配顔だった。去年も今年も警備上困ると神社側に警告したというが、人気のある行事だけに強引に中止させるわけにもいかぬ。」

とある。神社としてもかなり葛藤があったことが感じられる。ただ、最終頁の歴代の福男データ(表1)⁸⁾を見ても分かるように、この後も数年は減っているが、走る人は存在し、参加人数自体は増えている。

昭和40年代以降、新聞で目に付くようになるのは、昭和41年の中止を報じた新聞にも「それでも四国方面からの団体客ら約百人が開門を待ちかねて参拝した。」とあるように、漁業関係者の参加である。

以下に列举する。

「中でも祈禱所は大繁盛で和歌山県のある漁協組の百人をはじめ団体が目立ち、四人の神主さんが手ぎわよくさばっていた」(1968年(昭和43年)1月10日付神戸新聞夕刊)

「赤門が開かれると同時に、寒さにふるえながら待っていた参拝客の一団が本殿へ向かって小走り、参拝客の列は切れる間もない。午前中は淡路、四国、山陰地方から観光バスに乗った漁業関係者の参拝客が目立ち・・・」(1969年(昭和44年)1月10日付神戸新聞夕刊)

「・・・東島義哲さんが一番乗り。今日が本番だけに、京阪神のほか四国⁹⁾、山陰地方の漁業関係者もバスを連ねて参拝・・・」(1970年(昭和45年)1月10日付神戸新聞夕刊)

「本殿には神戸市の漁業関係者から奉納された四十八キロもある南洋産マグロ2尾¹⁰⁾が“鎮座”「エンギがええ」と参拝客の人気をひとりじめ」(1972年(昭和47

年) 1月11日付神戸新聞阪神版)

「十日午前六時、忌籠神事のため閉じられていた各門が一斉に開かれると、県北の城崎郡香住町からやってきた漁師さんら約百六十人の参拝客が拝殿に殺到、一番福をきそった。」(1973年(昭和48年)1月11日付神戸新聞阪神版)

「・・・前夜から来ていたという兵庫県城崎郡香住町香住の商業、原田稔さん(二七)・・・ら三人が“福男”となり「縁起」がいいと大喜び」(51年1月11日神戸新聞阪神版)

このように氏子以外の地域でえびす信仰の強い地域の参詣者が、観光バスを乗り継いで「一番福」の荣誉に浴しようとして参拝(祈禱殿に昇殿しての参拝)を行う、またはそのうちの脚自慢の者が、同時間に行われていた、門開け行事を盛り上げることに貢献したのではないか。

考察で述べるが、この漁業従事者による積極的な門開け行事への参加が、モータリゼーションを含めた高度経済成長によって変容を余儀なくされた新暦の十日戎におけるこの行事の価値を西宮神社周辺の社会が再評価することに繋がったのではと考えることができる。

次の項では、高度経済成長がこの行事に影響を与え始めた時期である1962年(昭和37年)の福男を、そしてその次の項では、その高度経済成長以降、門開け行事に関する報道が低調になった頃、積極的に行事に参加していた漁業関係者である1979・1980年(昭和54・55年)の福男の2人へのインタビューを行い、特にどのような気持ちで参加されたのかという動機について、そしてその後について詳しく聞くことで、新聞紙上から読み取れる変化との相違が無いかの検証を行いたい。

4、昭和37年アスリート一番福「吉井弘」

1962年(昭和37年)の一番福は、吉井弘氏である。残念なことに吉井氏は故人となっているが、遺族の方から詳しい話を聞くことが出来たので、そのインタビューをここで紹介したい。1962年(昭和37年)というのは日本がオリンピックへと突入する、高度経済成長期真っただ中の時期である。そのような流れの中で、吉井氏にとってはどのような神事であったのか、そして彼自身がどのような人物であったのかについて、甥の成川雄士氏¹⁾に聞いた。



写真1：陸上部 左上が吉井氏(卒業アルバムより)

吉井家は、兵庫県西宮市の苦楽園口にある旧家であった。

吉井弘氏の祖母が浄土宗の熱心な信者であり西宮の浄土宗の寺院の檀家総代をつとめていた。仏縁あって、真言宗で学ぶこととなり僧籍を取り、西宮で栄潤寺という高野山派の寺院を建立するに至った。吉井氏は長男であったが、祖母が弟を後継者に指名したために彼自身は違う道へと進むこと、家を出て仕事をすることを運命付けられていたとのことである。

甲南中学へと進学し、陸上部へ入った。吉井氏は長距離が専門の選手だったらしく、「陸上部のエース」であり、脚には自信があった。阪神間の中学校の中では昭和30年代においても福男競争は有名であり、各学校の陸上部が「エースを勝たせてやりたい」とのことで、他の学校の選手を妨害するチームプレーめいたことは行っていたと聞いたそうである。

実際走ったのは、当時の阪神間にあった学校同士の対抗戦さながらの部分があることも、良く知っていたが、彼自身はチームプレーで行うのではなく、「まずは試しに走ってやろう」という気持ちで走ったとのこと。彼自身や周りの参加者たちはこの行事を指す時には「神事」とは言わなかったとのことであるが、「福男」の語は定着していた。ちなみに当時の神戸新聞1月10日付の夕刊では次のような記述である。

「・・・午前六時かっきり打ち鳴らす一番太鼓を合図に正面赤門が開くや、徹夜の学生もまじえトレーニングパンツ、運動グツの軽装で待ち構えていた約五十人がどつと殺到、約二百メートルの参道をまっしぐら。決勝点の拝殿の鈴の緒へ。一番乗りは西宮市菊谷町一二十四甲南高一年吉井弘君(一六)二番は同市今津山中町一八、運転手村上精一さん(二五)、三番は灘高二年平井行雄君(一七)の三人が今年の福男になりそろって昇殿、参拝、同神社から記念の白木のえびす像が贈られた。福男一番の吉井君は中学二年からの陸上選手で初参加。二番の村上さんは去年も二番で、その前は四年連続トップだったが「百メートル以上になると足がいうことを聞かせません」と残念そう」

とある。ここから阪神間の恒例行事に組み込まれていたこと、そして戦前と同じく「地元の常連」が走っていたことなどが見て取れる。時代的には自動車が多くやって来る時代ではあったものの、門開け行事に走る参加者に関しては戦前戦後であまり変化が無いこともここから読み取れる。彼自身は、その後この行事には参加せず、陸上部の選手としてそして学年のリーダー的存在として自治会総務(生徒会)活動を行っていた。甥から見ても「努力家」であったとのことである。

記事2：企業時代の吉井氏

甲南大学を出た後、住友軽金属工業に入社。山形県酒田市、町田市、横浜と転勤を繰り返し、まさしく前述の通り、

吉井弘氏
住友軽金属工業常務

じ、メーカー志向のな
かてアルミの会社へ就
職を決めた。
酒田時代には住友ア

国内にも有名
社でこの時期
る本えびすで
争い「早朝の
時に拝殿へ一
躍う恒例行事
によって騒ぎが

西宮神社で「福男」に

実家を出て働き、会社の常務にまでなり、2 人の娘に恵まれた。甥の成川氏よりいただいた 2005 年(コピーのため月日不明)の日刊産業新聞にコメントが出ているが、一番福のことは 60 歳になるまであまり話をしなかったようである。記事の中では「これまで隠していたわけではないが、自慢することでもない」とインタビューに答えている。

このインタビューから、感じたこととしては新聞から読み取ったことと同じく、昭和 30 年代の高度経済成長の初期においては依然として、西宮神社の氏子区域よりは広範囲ではあるが、戦前に築かれた電鉄を主とした公共交通機関の範囲、つまり阪神間での陸上競技会的な福男競争となっていることが改めて確認された。これは昭和 20 年の福男であった上田研蔵氏の事例と似ている。つまり、門開け行事においては参加者の属性は戦前戦後で大きな変容はなかったとも言えるだろう。

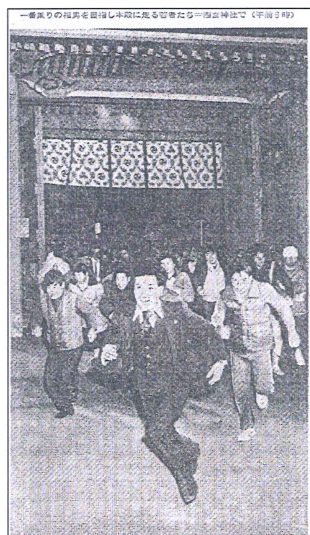
5、昭和 50 年代を彩った一番福「西上喜代松」

1979・1980 年(昭和 54 年・55 年)と連続で一番福となった西上氏は現在でも兵庫県の香住(現:美方町香住区)に在住である。実家は水産加工業を営んでおり、創業は大正 6 年である。現在では主にはた、かれい、煮ぎすなどの一夜干しの生産・販売を行っている。

西上氏は地元の高専の水産科を出た後、川西市の東洋工業短期大学へ進学、そして卒業して戻って以後にこの行事に参加した。きっかけは水産加工業協同組合のえびす講であった。1947 年(昭和 22 年)から存在したそうだが、実際記録として残っているのは、昭和 55 年以降である。約 80 軒が組合に参加¹²⁾しており、毎年くじ引きなどで決められた 8 から 10 名が、代参ということで十日戎の行われている西宮神社に参拝に行くのが目的である。当時は歩いて 10 分から 15 分くらいの場所にある民宿に泊まっていたとの

ことである。この目的の中で最大のものは、「1 月 10 日の一番祈禱を行ってもらい、おれをいただく」というものであり、現在でも 1 月 9 日の夕刻にまず参拝して、一番祈禱の予約をするそうである。

記事 3: 1979 年(昭和 54 年)1 月 10 日付神戸新聞夕刊



て 1 年目の西上氏に行かせることにしたとのこと。父はこのときまでに福男選りを知っていたとのことで、若くサッカーなどの経験もある西上氏に走らせようと考えていたとのことである。当時は、代参の人のもどちらかと言えば高齢者が多く「靴だけ履き替えて、ネクタイをして走っていた」とのことである。

西宮の宿舎で休んだ後、赤門前に到着し、開門を待った。当時は朝の 5 時ごろから来ている人はほとんどおらず、午前 6 時のときでも 300 人もいただろうか、とのことであった。門の開くときには 54 年には赤門の真ん中のすぐ左、55 年は真ん中のすぐ右にいた。当時は砂利道であり、最後も本殿の東側の階段から入る形¹³⁾であった。西上氏はその階段をひととびし、真ん中の紐を必死に掴んだ。その時宮司が彼を掴み「一番!」と声高々に叫んだという。

走る前までは、どのようなものか分かっていなかったが、走るからには「一番になろう」と決めていたという。2 回目には少しは余裕が出たが、1 回目には周りも見えずに走った。一番になって、昼のテレビ、そして夕方のテレビにまで映像が出たのには驚いたとのことである。「まさかそんな大事になろうとは」というのが感想であった。



記事 4: 1979 年(昭和 54 年)1 月 10 日付神戸新聞夕刊

1980 年(昭和 55 年)の 2 回目は組合からではなく、個人として参加をした。前回は代参をさせていただいた組合へ持ち帰る福、そして今回は家へ持ち帰る福と考えたためでもある。



記事 5: 昭和 55 年 1 月 10 日付神戸新聞夕刊

2 回目はある程度、ルートや雰囲気分かっていたのと、なによりも福男という立場が周りからも一目おかれる存在となっていた。早起きの先輩に頼んで午前 4 時ごろに場所を取ってもらい、午前 5 時半くらいに場所に到着した。1 回目は、まず門を出てまっすぐ走れ!と先輩から教わったが、どの様に道が付いているのかも分からず、不安もあったが、2 回目はある程度分かっていたことも大きい。

このように西上氏は運良く 2 回も一番になることが出来

たが、その後、西上氏は福男の競争には参加しなかった。

その理由は、父からの忠告であったという。組合に福を1つ、そして個人で福を1つずつ取った。これほど幸せな福男はいない。次も取れるかもしれないが、その福は人に分けてやるべきである。不幸が無い限りはお参りだけするのが正しいのでは、とのことだったそうである。

そのこともあり、西上氏はその後走らなかつた。しかし現在でも、十日戎には西宮神社を参詣することも多々あるという。福男となって良かったことは、川西から帰ってきて香住で商売を行う頃でもあり、福男になったことで、多くの同業者から早くに顔を覚えてもらうことに繋がった点である。まさに福である。現在残念なことは、自分が2回福男になったことを誰も信じてくれないことである¹⁴⁾。



写真2：現在の西上氏 神像と共に（2012年9月著者近影）

現在でも、昭和55年の一番福のときにいただいた神像は大切に持っている。父は他界したが、自分が亡くなった時にはお棺にこの神像と一緒にに入れて欲しいと話している。自分にとって福男選びはとても大切な思い出であると話された。

このインタビューから感じたことは、西上氏のそしてこの香住の地域の持つえびす信仰であった。脚が速く、雰囲気も感じ取った西上氏はこの後、3回4回と福男競争に挑戦し、福男になることは可能だっただろう。しかしそれを断念させた氏の父の忠告からは、真摯なえびす信仰を感じる。福は自らが進んで取りに行くのではなく、えびす様から授かるものであるということ。いただいた福は他の人にも分け与えるべきだという考え方。「えびす講」としてやってきて、まずは講に福を持って帰り、次は自分であるという考え方。新聞紙上に現われなくとも、このような真摯なえびす神への信仰心からの走りは、これまで参加して来た人々や社会に影響を与えたと見るべきではないか。

6、考察「十日戎開門神事」の創造

この昭和30年代と50年代の福男から見えてくることは何か。50年代の西上氏は遠方ということもあり、組織の一員として参加し、香住水産加工業協同組合としての福をまず持ち帰ろうとしたこと、これまでの阪神間のアスリートが集うような競技会的な意味合いとは違う、えびす信仰があつてのお参りだったという側面が非常に強い。

西上氏が走る10年以上前の1968年(昭和43年)1月11日付の朝日新聞阪神版には

「・・・また祈とう所も大繁盛前日から予約していた城崎郡香住町の海産物業者が一番祈とうを受けたのをはじめ、全国各地の漁協組合や会社など団体がつめかけた」とあり、香住のこの組合が「一番祈祷」を行ってもらうことに重きを置いていることは興味深い。つまり、漁業神としての各漁村に存在したえびす信仰の形¹⁵⁾と、電鉄などによって生み出された新暦の西宮神社での十日戎で生まれた概念である「一番」とが重層的に存在しているところである。旧来のえびす信仰を行っている、または祭に対して明確にハレとケの感覚を持っている人々が、モータリゼーションによって西宮神社に容易に行きやすくなったこと。その人たちが、福男になり、実際に祭事に参加することで、社会構造の変革によって「イゴモリ」の意味に気付かなくなった西宮近辺の人たちに対して、「門が開いて走って一番になること、とにかく周りが見えずに一心になって走ることが十日戎の原点であり、まさに神人和合の境地に達するのだ」というような「ただの福男競争ではない」「神事」としての門開け行事の姿を再評価させることに繋がったのではないか。この辺りは「3、昭和30年代から50年代にかけての神事の変遷」でも述べたが、それは実際に西上氏とのインタビューの中で感じたえびす信仰であり、講や家族といった人の繋がりの深さであった。祈祷のための参詣を行う彼らの姿が、他の参加者、そしてそれを取材する報道陣の目にいかに映ったのだろうか。

実際、この門開けを「神事」と呼称するようになったのはいつ頃であり何が要因なのだろうか。吉井弘氏が走っていた頃の昭和38年1月10日付の神戸新聞夕刊に「門開け神事」という言葉が出る。それまでは「開門福争い」「恒例の福男レース」「福男一番争い」などとなっていた。先述の昭和40年の記事「ひとこと」にも「四百年の伝統を誇る「福男」の神事がある」と出てくる。1965年(昭和40年)から先は、中止もあり、新聞紙面自体も縮小され、阪神版でも今宮戎神社や柳原神社のことを載せるようになっていた時期が散見される。1975年になって、漁業関係者の多数の参加もあつて、再び写真入りで報道されるようになってから、神戸新聞では「福男一番」を決める競争」という言い方が昭和60年代まで定着する。

平成になって「福男選び」という語が登場する¹⁶⁾。2012年現在、西宮神社禰宜の吉井良英氏は1989年(平成元年)の門開け行事が、昭和天皇崩御の3日後であったことも、大きかったという。実際この年は、福男による鏡割りは行われておらず、自粛した行事が他にも多い。それまで使用されていた「福男一番競争」「一番争い」よりも「神事」「福男選び」とした方が良かったのだと考えられる。実際、当時は十日戎自体の自粛、取り止めまで検討されていたようである。

そうだとすると、興味深いのが、その後も説得性を持って「神事・福男選び」と20数年経っても使われ続けているところである。

自分で競争するのではなく、「選ばれ」るのである。主客が逆になる。この語の創造、その後1998年(平成10年)から神戸新聞では見られる「開門神事福男選び」の語が定着する¹⁷⁾。神社側の資料の中には1993年(平成5年)よりこの行事において、抽選会を行うこととなり、それまで以上に人が来ることに繋がった。報道向けの資料の中には「開門神事福男選び」と明記されている。居籠が神事で、

その後門を開けて参拝者が入ってくる、彼らがその一番を競ってただレースを行うという見解ではなく、神社側も福男が「選ばれる」神事なのだという認識を持ち、それがマスメディアによって流されることとなった。まさに「伝統の創造」ならぬ「十日戎開門「神事」の創造」である。

これまでの論考をまとめるならば、室町期辺りから行われて来たイゴモリ・イミの祭り、そしてそれが開けて人々が「神人和合」の境地に達する状態が、十日戎の原型「御狩り(ミカリ=ミガワリ)神事」であるというのは、2つの論考で述べられている¹⁸⁾。

そして、西宮の場合、そのミカリの状態を作り出す装置として表大門・赤門が近世以降大きな役割を果たしてきた。だからこそ鉄道や電鉄が出来、多数の参詣客が来るようになって西宮スタイルを容易に曲げずに済んだのであろう。そして新暦による新しい祭りが、大阪神戸といった都市住民の参詣客の増加により旧暦のそれを凌駕していったが、その過程で旧暦にて行われてきた「イゴモリ祭り」がそのまま、赤門を使って同じく行われることとなった。

その中で、それまでの伝統的な祭事に加われなかった新参の住民が、この行事に参加し、新暦の祭事を盛り上げていく。その中で田中太一氏のような青年団や在郷軍人などという近代の市民としての「一番福・福男」が生まれてくることとなった。戦時中は、その競争という側面から時局の流れに乗せられることもあったが、戦後になっても復興十日戎には、西宮空襲をかううじてくぐり抜けた赤門を使つての門開け行事がついて来た。

この祭事が最大の危機的状況を迎えたのが、高度経済成長期である。十日戎への参詣客は交通機関の更なる発達で増えることとなったが、それは新たに地方から人たちが多数やってくることも繋がった。それは十日戎自体が西宮の氏子地域のみ祭から、より広範囲な近畿圏一体の祭りへと変化を遂げることになったが、相対的に門開け行事の報道が少なくなることもあった。そしてそれを打開したのが、同じく交通機関の発達によって来ることが可能となった、漁業神としてのエビスを信仰する漁業関係の参詣者であった。

彼らの信仰の厚さ、西宮では少なくなってしまった講の繋がりなどが、そこにこめられた意味性を無くし、衰退していた門開け行事を復興させると同時に、もともと西宮から離れた地に住んでいる人たちが、この神事を再評価しているというサインを多くの人々に送ることにもなった。

まさに彼らがいいたからこそ、西宮、阪神間にいる住民たちは西宮神社の持つももとの文化資源に気付くことができた。神社側からの発信であったにせよ彼らのサインによって「神事、福男選び」という創造された語が受け入れられ、大人数の参加者が集まる状態にまでなったのではない。参加自由度の高さの他に、現代社会における生活ではなかなか感じられなくなった、非日常性を味わえる機会「神事」として、更なる発展が見込まれると予想する。

7. 現代につながる十日戎開門神事の課題

現代までに至る流れの中で、「門開け」は「開門神事」となり、多くの人々が参加する祭事として発展することとなった。その発展の過程は、外からの要因が主となって変化をしたといえる。ここまで多くの人が参加するようになって

た背景は、参加への手軽さと、ももとの成立において、西宮地域が近代都市化する過程でうまれた祭であるために、旧住民の祭ではなく、新住民(現在では50年以上も住んでいる「新住民」となるが)が入りやすい行事であったなどの理由によるのであろう。現存する多くの祭では存在する、旧住民などとの葛藤が少なく、多彩な地域から参加できる可能性を持っている。それ故にこそ、運営を巡って参加者と催行する神社との間で摩擦、葛藤が起きている。

伊藤亜人氏はよさこい祭が地域活性化につながった要因として、緩やかな運営方法などによってそれまでの伝統的な祭が取り込めなかった都市の中での周辺の住民が主役になりえたこと¹⁹⁾、そして新しい考え、物事が伝統を生み出すと行つた「伝統の創造」論とはまた違った、新しい市民の力で絶えず変化し続けるという「祭は進化する」側面を残したのが大きい、と述べている。実際、この十日戎開門神事を見るとき、ほとんどが、各個人で参加するため、祭としての「縁」は築きにくい側面がある。しかし、それ以外の開門神事が大きくなってきた動きについては似ている部分が多い。地元住民はそこまでの意識は持っていないだろうが、この神事が西宮の地域活性化のための文化資源としてより大きく作用する可能性をも秘めている。

課題となるのが、主催者の問題であろう。今回の論考でも挙げたが、門を開ける、祭りを作っていくなどのスタッフが、歴史的な流れの中で既存の氏子組織を離れてしまったために、行う人がいない実情がある。現在、ももとのこの開門神事に参加していたメンバーが中心となつてまず「開門神事保存会」を作った。これは、開門神事の良さを伝えていこう、そして困った問題が起これないようにと走っていた参加者が逆に門を開ける補助的な役割として動いていこうというものであった²⁰⁾。メンバーは関西圏出身者が多く、西宮の氏子地域出身の人以外が圧倒的であり、伊藤氏のいう「周辺の人」たちが作り出した任意団体である。

その活動が奏功して、2009年(平成21年)より西宮神社公認の開門神事講社という形で神社、氏子地域の人と関わっていく形での開門神事の運営を任されることとなった。当然のことながら、旧住民との間での葛藤が起きると同時に神事の運営に当たる上で様々な問題が出てくる可能性もある。このように出現が予想される問題に対してこれまでの考察と今後の研究を通じて、さらに当事者として、以下の視点からより良い課題解決法を見出していきたい。それは、公共人類学的ないしは公共民俗学的分野という視点である²¹⁾。まずは、旧住民と講社メンバーとの橋渡しを行い、これまでの開門神事の変遷を積極的に話す、ないしはそういった機会を持つことで、神事自体の持つ文化資源としての特性を認識していく更には実践を行う中での問題点を一緒に解決していくという、協働しながら新しい文化、祭りのモデルの提示を社会全体に提案をしていきたい。なぜなら当神事は日本社会の中でも独特な形態でありながら、地域活性という側面においては普遍性を持っていると考えるためである。今後もこの祭事に関わることで、どのような問題点が出て、いかに解決していったのかを記録していくという民族的な視点、またどのような属性の参加者が多いのかという社会統計学的な視点も取り入れながら、複合的にこの神事を調査し、社会に還元していくことができると考えている。

(注)

- 1) 荒川裕紀「西宮神社十日戎開門神事における歴史的変遷」『北九州工業高等専門学校研究報告』第43号 2010/1
- 2) 1937年(昭和12年)より「連続一番詣り」をしていた田中太一氏、1945年(昭和20年)の一番福上田研蔵氏の両名は、まさにこのイベントを「神事」として認識していた。それは例えば田中氏では、ご家族の言葉では「亡くなるまで参加していました」や上田氏の「正月もやりますが、十日戎は3日とも行きます。これがないと年が明けた気がしない」などの言葉に表れている。
- 3) 荒川裕紀「西宮神社十日戎開門神事における歴史的変遷」『北九州工業高等専門学校研究報告』第45号 2010/1
- 4) 門を開けないわけではなく、神社として福男を選ばないこととした。それでも多くの人が走った。
- 5) 平山昇『鉄道が変えた社寺参詣 初詣は社寺参詣とともに生まれ育った』2012、交通新聞社 pp.205-212
- 6) 例えば、表大門の掲示、阪神電車の看板などの公共物にもこの話が浸透している。
- 7) 他の新聞社の記事には「けが人3名」との記載があるものもある。実際現在でも開門神事は、石畳の上を疾走するので転びやすい。
- 8) このデータは、基本的には神戸新聞を中心に集めたものである。神戸新聞に記載が無い場合は、朝日新聞阪神版を主に使用している。参加人数が社によって異なる年が多々あるが、大まかな人数が把握できると思う。属性も調べているので、今回の研究報告ではデータ分析を主にやっていきたい。
- 9) 1966年(昭和41年)1月10日付神戸新聞夕刊には、高知からは漁船を連ねて参拝に来た事例も書かれている。
- 10) 戎さまといえば鯛なのだが、保存の関係かもしれない。この時代の奉納を期に西宮神社の拝殿にて、大きな冷凍マグロが奉納されるようになり、ここに硬貨を貼り付ける人が出て、風物詩となった。
- 11) 実は甥である成川氏とは、幼稚園時代からの友人である。福男に関する文献調査を進めていく中で、吉井氏があったのだが、そこまで気を留めずにいた。ふと彼との話の中で、吉井氏と叔父甥の関係であることを聞いて驚愕した。彼が生前はかなりインタビューを行ってくれてことは思いがけない喜びであった。
- 12) 50年代でも列車で行くことが多かったそうである。現在は高速道も発達したために自家用車で行くことが多くなったとのことである。新聞上では「バスを連ねて」の記事が多いが10名ほどであると、バスないしはマイクロバスを借りるよりも経済的、そして時間的にも効率的だったことも考えられる。
- 13) 43号でも既に指摘したが、現在と開門神事のルートは異なっている。現在は拝殿の正面が開放たれていてそこに入っていく形であるが、平成になるまでは東から入っていく形をとっていた。そして一番福は手前の鈴紐ではなく、真ん中の鈴紐であった。間違っ手前の紐を引いて三番福となった参加者もいた。平成10年に1つにまとめられ、そして現在では神職が順番を見極めて一番から三番までを「選ぶ」形となっている。
- 14) 自分の子どもにまで本当に取ったのかと聞かれ、戎の神像や古い切抜きを出してくるようになったと話されていた。えびす信仰の面を含めて素晴らしい福男であった。
- 15) 日本全国のえびす信仰に関する研究であるならば、成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻田中宣一研究室編『全国エビス信仰調査報告書 えびすのせかい』2003、が詳しい。pp.176に但馬海岸のえびす信仰の様子が記述されている。
- 16) 禰宜の吉井良英氏は1992年(平成4年)に西宮神社へ戻ってこられたが、その時には神社としては開門神事福

男選びという語句を使っていたとのこと。実際に当時の取材用資料にもその語句が確認できる。吉井良英氏の推測でもあるが、マスコミが作り出したのではなく、神社側が呼称の統一を図ったのが強いとのこと。もともと居籠が「神事」であり、その状態からの解放の意味で門を開けていた神社であったが、この時期に名称変更があったのも興味深い。

- 17) 実際、震災から一年後の1996年の十日戎開門神事は、朝日新聞の夕刊は一面カラー写真であった。復興を表す意味においても開門神事の動の部分は象徴的であったといえる。その後、神事という言葉が震災報道の多かった神戸新聞で定着するのと関係があるように感じられる。
- 18) 例えば吉井貞俊『えびす信仰とその風土』1989、国書刊行会 pp.278-279、吉井良隆『神社史論攷』1990、西宮神社 pp.50-67 など
- 19) 伊藤亜人『文化人類学で読む日本の民俗社会』2007、有斐閣選書 pp.169-174
- 20) 神事を手伝い始めた際、参加者メンバーが地元のことを知らない状態であったために当初、氏子青年会の下部組織という形で活動させていただいた。青年会は主にだんじり祭礼、十日戎奉仕なども積極的に行っている。
- 21) 岩本通弥、菅豊、中村淳『民俗学の可能性を拓く「野の学問」とアカデミズム』2012、pp.119-120 青弓社 菅豊氏は公共民俗学を「異質な立場性を理解するとともにそれを乗り越えて多様なアクターが協働し、文化の所有権や表象行為の権威性という困難な問題を自覚しながら、表象する正当性を獲得して向き合う人々の社会や文化に介入し、その人々の幸福のためにそこに存在する地域や地域の文化、地域の人々を客体化し、そしてなんらかの擁護に関与し、さらに、それら総体に関わる自他の実践研究を再帰的、順応的にとらえ直す民俗学の方角性である」としている。

(追記)

私は、1997年からこの十日戎開門神事の研究を始めた。その際、まず西宮神社に行って、当時の広報担当であった吉井良英氏から様々な話を聞く機会に恵まれた。今このように開門神事研究が出来ているのもこの時に温かく迎えて下さったからに他ならない。そして、より文化的背景を示唆して下さった先生が、吉井貞俊権宮司であった。学術的な視点を持ちながら、絵画などにも類まれなる才能をお持ちの方であった。一学部生の私を親切にご指導下さり、1998年から始まった「えびす信仰研究会」(故米山俊直会長)においてもお世話になった。2001年に開門神事の歴史的変遷をたどった拙文「十日戎開門神事考」が出た際に真っ先に目を通して下さり、あなたのお陰で報告書が出せたのだよと語って下さったことを今でも思い出す。北九州高専に来てから本格的に開門神事研究を始めた際にもたくさんの励ましをいただいた。私にとって戎様が与えて下さった素晴らしいご縁であった。

その先生が、2012年11月、他界された。

まだまだ、開門神事の研究としては物足りず、これから更なるご指導、ご鞭撻を賜りたかった先生であった。今後、これまでの論文をまとめて開門神事全体を見通せる論考へと進めていきたいが、まずはこの論考を誠に稚拙であることは承知の上で吉井貞俊先生の御霊に捧げたい。戎の杜で、不肖の弟子を見守っていただければ幸いである。改めて、この場を借りて深悼し、これまでのご指導に感謝申し上げます。次第である。(2012年11月12日 受理)

年度	元号	一番福職業など	住所	年齢	二番福職業など	住所	年齢	三番福職業など	住所	年齢	人数
1921	T10	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	21							
1922	T11	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	22							
1923	T12	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	23							
1924	T13	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	24							
1925	T14	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	25							
1926	T15	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	26							
1927	S2	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	27							
1928	S3	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	28							
1929	S4	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	29							
1930	S5	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	30							
1931	S6	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	31							
1932	S7	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	32							
1933	S8	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	33							200
1934	S9	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	34							200
1935	S10	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	35							200
1936	S11	社家町氏子の子息	西宮市社家町	36	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	36				200
1937	S12	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	37							3000
1938	S13	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	38	水上郡より(同時一番)	丹波水上郡春日部村	不明				3000
1939	S14	田口樽丸商店	西宮市石在町	25	製材店勤務・在郷軍人	西宮市石在町	29	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	39	15
1940	S15	田口樽丸商店	西宮市石在町	26							300
1941	S16	佐々木時計店・青年団	西宮市今在家町	23	田口樽丸商店	西宮市石在町	27	甲陽中学4年		18	300
1942	S17	神戸一中5年	西宮市川東町	18							300
1943	S18	尼崎中学4年	西宮市荒戎町	17	大社青年学校3年	西宮市越木岩	19	関西学院中学3年	西宮市川西町	15	未記載
1944	S19				関西学院中学4年	西宮市川西町	16				未記載
1945	S20	関西学院中学5年	西宮市川西町	17							未記載
1946	S21	(参拝客例年の1割程度、進駐軍も物珍しさに見に来る)									未記載
1947	S22										未記載
1948	S23										未記載
1949	S24										15
1950	S25	(朝来の雨とも言わず、午前6時の開門を待ちかねて、どっと人の波が押し出し……)									100
1951	S26										未記載
1952	S27										未記載
1953	S28	職種不明	東灘区魚崎新堀町	25	職種不明	灘区中原通	不明	職種不明	西宮市浜脇町	不明	1000
1954	S29	住吉中学教諭	東灘区住吉町恋野	26	神戸工業高校2年	東灘区住吉町丸ノ後	16	職種不明	東灘区住吉町恋野	25	未記載
1955	S30	住吉中学教諭	東灘区住吉町恋野	27	神戸工業高校3年	東灘区住吉町丸ノ後	18	米穀商	西宮市東ノ町	18	500
1956	S31	公務員	西宮市川東町	30	住吉中学教諭	東灘区住吉町恋野	28	米穀商	西宮市東ノ町	19	100
1957	S32	田中製機運転手	西宮市今津中町	19	神戸商業高校3年	東灘区住吉堂	19	会社員	西宮市宮前町	22	100
1958	S33	田中製機運転手	西宮市今津中町	20	神戸商業高校2年	東灘区住吉町馬場東	18	岡崎牧場	西宮市田代町	27	30
1959	S34	田中製機運転手	西宮市今津中町	21	神戸商業高校3年	東灘区住吉町馬場東	19	会社員	西宮市越水町	24	100
1960	S35	田中製機運転手	西宮市今津中町	22	会社員	西宮市越水町	25	店員	東灘区住吉町馬場東	20	150
1961	S36	灘高校1年	西宮市千歳町	16	田中製機運転手	西宮市今津中町	24	会社員	西宮市平松町	26	60
1962	S37	甲南高校1年	西宮市菊谷町	16	田中製機運転手	西宮市今津中町	25	灘高校2年	西宮市千歳町	17	50
1963	S38	灘高校3年	西宮市千歳町	18	県立尼崎高校2年	西宮市用海町	18	鳴尾高校1年	西宮市浜町	16	80
1964	S39	会社員	西宮市神楽町	21	鳴尾高校3年	西宮市今津上野町	18	鳴尾高校3年	西宮市甲子園1番町	18	50
1965	S40	市立浜脇中3年	西宮市六瀬寺町	15	甲南高校1年	西宮市鳴尾町	16	大阪大工学部4回	西宮市浜甲子園	22	100
1966	S41	(中止、「静かな十日戎」)									60
1967	S42										2
1968	S43	建材業	神戸市灘区上野通	31	職種不明	岡山県桑市	23	職種不明	和歌山県田辺市	27	300
1969	S44	建材業	神戸市灘区上野通	32							未記載
1970	S45	建材業	神戸市灘区上野通	33							200
1971	S46	ダイエー社員	西宮市松下町ダイエー寮	22							350
1972	S47	建材業	灘区上野通	35	喫茶店経営	西宮市平松町	42	大社中学	西宮市平松町	13	350
1973	S48	会社員	西宮市平松町	19	神戸商大生	灘区城ノ内	23	職種不明	東京都世田谷区下馬	25	160
1974	S49	会社員	西宮市平松町	20	関西学院大学	芦屋市浜町	20	建材業	灘区上野通	37	250
1975	S50	会社員	西宮市平松町	21	学生	西宮市石在町	17	会社員	西宮市泉町	42	未記載
1976	S51	商業	城崎郡香住町香住	27	理容師	西宮市甲子園7番町	27	水産加工業	城崎郡香住町若松	不明	300
1977	S52	理容師	西宮市甲子園7番町	28							未記載
1978	S53	兵庫県警	西宮市甲子園9番町	32	理容師	西宮市甲子園	29	会社員	奈良県生駒市	26	300
1979	S54	水産加工業	城崎郡香住町若松	21	理容師	西宮市甲子園7番町	30	電気工事業	西宮市平松町	25	300
1980	S55	水産加工業	城崎郡香住町若松	22	市立今津中学2年	西宮市染殿町	14	水産加工業	城崎郡香住町一日市	20	350
1981	S56	保養所管理人	灘区六甲山町北六甲	35	高校生	宝塚市安倉町西	16	会社員	尼崎市常光寺町元町	20	150
1982	S57	大阪体育大学3年	茨木市永代町	21	大阪体育大学3年	伊丹市級野	21	会社員	西宮市染殿町	16	300
1983	S58	大阪体育大学4年	伊丹市級野	22	大阪体育大学4年	茨木市水尾	22	大阪体育大学4年	茨木市永代町	22	200
1984	S59	県立伊丹北高校職員	伊丹市大野	24	市立大社中学3年	西宮市若松町	15	県立尼崎北高校1年	尼崎市立花町	16	300
1985	S60	海技大学校運輸事務官	東灘区深江本町	28	大阪芸大1回	東灘区御影中町	19	大阪高校1年	西宮市建石町	16	200
1986	S61	中学職員	神戸市垂水区五色山	29	大阪芸大2回	東灘区御影中町	20	県立尼崎高校1年	尼崎市立花町	16	200
1987	S62	小西酒造	西宮市今津巽町	24	立命館大学3回	伊丹市北河原字北浦	21		西宮市今津巽町	21	200
1988	S63	立命館大学4回	伊丹市北河原字北浦	22		尼崎市武庫豊町3丁目	20	大阪芸大4回	東灘区御影中町	22	200
1989	H1	会社員	伊丹市北河原字北浦	23	写真家	東灘区御影中町	23		加東都社町上田	23	300
1990	H2	会社員	伊丹市北河原字北浦	24		西宮市里中町	18		西宮市若松町	17	260
1991	H3	本庄中学3年	東灘区本庄町	15	市立大社中学3年	西宮市桜谷町	14	県立東灘高校	兵庫県神田町	18	340
1992	H4	尼崎西高校3年	尼崎市元浜町	18	城内高校4年生	尼崎市塚口本町	19	西宮甲山高校1年	西宮市大谷町	16	345
1993	H5	大阪大成高校2年	西宮市桜谷町	16	大阪大成高校2年生	西宮市南郷町	17	西宮今津高校2年	西宮市今津久寿川町	17	450
1994	H6	大阪大成高校3年	西宮市桜谷町	17	西宮今津高校3年	西宮市今津大東町	18	大阪大成高校3年生	西宮市南郷町	18	500
1995	H7	住友電気工業	大阪市此花区西島	18	大阪体育大学1年	大阪府泉南郡熊取町	19	(株)上組	東灘区御影中町		700
1996	H8	大阪体育大学2年	大阪府泉南郡熊取町	20	住友電気工業	大阪市此花区西島	19	国立明石高専	芦屋市	20	650
1997	H9	大阪体育大学3年	大阪府泉南郡熊取町	21	神戸国際大学2年	尼崎市西立花町	20	住友電気工業	大阪市此花区西島	20	900
1998	H10	大阪体育大学1年	大阪府泉佐野市	19	仏教大学3年	尼崎市西立花町	21	関西学院大学	西宮市上ヶ原三番町	21	1200
1999	H11	大阪体育大学2年	大阪府泉南郡熊取町	19	西宮市消防局消防士	西宮市上甲子園	23	辰馬本家酒造(株)	西宮市今津巽町	24	2000
2000	H12	スポーツインストラクター	一宮市花池	21	西宮市消防局消防士	西宮市上甲子園	24	甲南大学	神戸市西区学園東町	20	1300
2001	H13	西宮市消防局消防士	西宮市上甲子園	25	立命館宇治高校	京都府相楽郡精華町	18	県立西宮高校1年生	西宮市山口町名来	16	1300
2002	H14	スポーツインストラクター	一宮市花池	23	甲南大学	神戸市西区学園東町	22	県立西宮高校2年生	西宮市山口町名来	17	1500
2003	H15	県立西宮高校3年生	西宮市山口町名来	18	兵庫リヨー	神戸市西区学園東町	23	大阪市消防局	四条畷市	21	2000
2004	H16	西宮市消防局	四条畷市	22	私立大阪高校2年	西宮市甲陽園山王町	16	兵庫リヨー	神戸市西区学園東町	24	2000
2005	H17	兵庫リヨー	神戸市西区学園東町	25	大学生	大津市	21	介護タクシー運転手	西宮市甲子園町	24	2000
2006	H18	会社員	加古川市野口町	20	宣教師	愛知県一宮市	27	大学生	神戸市須磨区	22	2000
2007	H19	会社員	加古川市野口町	21	消防士	宝塚市鹿塩	24	消防士	川西市多田院	28	2000
2008	H20	関西学院大学3年	西宮市甲陽園山王町	20	自営業	愛知県一宮市	29	消防士	宝塚市鹿塩	25	2500
2009	H21	元保育士	神戸市西区	24	介護タクシー運転手	西宮市甲子園町	28	福岡大学	福岡県那珂川町	20	6000
2010	H22	大阪体育大3年	大阪府熊取町	22	会社員	神戸市垂水区	24	関西大学4年	吹田市	22	6000
2011	H23	会社員	高砂市	26	会社員	箕面市	28	東京消防庁	東京都文京区	26	3000
2012	H24	成美大学経営情報学部3年	福知山市在任(福井出身)	21	大阪商業大学4年	大阪府在任(岡山出身)	22	茨木市職員	茨木市	26	3000